

城山氏による問題提起および参加者の個別報告をふまえて、最後に脇村孝平氏と Bin Wong 氏がコメントを述べた。

脇村氏ははじめに、データを収集し整理する作業は重要であり、本プロジェクトは理論が事前に存在しないという意味でヒューリスティックな研究であると述べた上で、4 点の提案を行った。1 点目は人口データの活用である。確かに 18 世紀以前の人口データの収集は容易ではないが、東南アジアでは 19 世紀に人口が急速に拡大したことを考えれば、その重要性は明らかである。人口データは様々な種類の情報の参照点ともなり得る。2 点目は疫病の影響を考慮することである。本プロジェクトでは、食料の利用可能性に焦点が絞られているが、それと関連した人々の健康も重要な側面であるとの指摘がなされた。3 点目はヨーロッパとの比較の観点から、稲作のインパクトを重視すべきことである。アジアの高い人口密度を可能にしたのは稲作の普及に他ならないためである。4 点目は降水量以外の諸要素を検討すべきことである。具体的には、価格や景気循環、エルニーニョの影響の分析が示唆された。

Wong 氏は、個別具体的な地域研究を超えた地域史を探究しようとする日本の研究の伝統を賞賛した上で、本プロジェクトの枠組みに関して問題を提起した。すなわち、多くの個別報告が気候（農業生産）と貿易の関係を分析の焦点としていたが、その論点はアナル学派以来多くの研究蓄積がすでに存在する。そうであるならば、本プロジェクトはグローバル・ヒストリー研究者にとって、いかなる新規性を持ちうるのか。また、経済発展・工業化が環境破壊や汚染を引き起こすという意味では、工業化と水圏は密接な関係にあるが、本プロジェクトでは 19 世紀のアジアにおける工業化という論点が欠如しているように感じられるとの指摘がなされた。その上で、Wong 氏は環境史の側面から水圏の問題を議論する重要性を示唆した。19・20 世紀は特異な時代であり、環境の問題から経済史は解放されていたが、本来、社会経済史は環境史によって規定される分野である。このため、本プロジェクトは環境史と経済史を水圏という観点から結びつける可能性を有している。

以上の問題提起およびコメントを通じてとりわけ強い印象を受けたのは、先行研究整理の明快さと問題設定の視野の広さである。城山氏の問題提起ならびに脇村氏・Wong 氏のコメントは多様な先行研究をふまえた上で、会議の個別研究の内容を関連づけて議論が展開しており、さらに可能な限り包括的な議論になるよう、様々な要素を検討しているように感じられた。論文の執筆においては課題を設定する際、「先行研究整理→批判→新規性の提示」というプロセスを経ることになるが、多くの参加者を有するプロジェクトであっても同様の過程を経て全体の議論が構成されるということを理解できた。その意味では、問題提起と個別報告、コメントで構成されるワークショップの全体を通じて、研究の基本の重要性を改めて確認することとなった。